

# 公共社会学はいかなる対話を構想しうるか

—「対話」と「経験」のつながりに着目して—

## Public Sociology Project for Dialogue: The Perspective for Connecting Dialogue and Experience

高田 正哉  
TAKATA Masaya

キーワード：公共社会学 Michael Burawoy 市民社会 対話 政治的想像力

### 概要

本論文は、2000年代にアメリカ社会学研究において主要な争点の一つとなっていた「公共社会学」(public sociology)について、主に市民間における自己の経験についての対話をするための条件である「社会的想像力」との関係性について考察するものである。公共社会学は、専門的知識を生産することを中心とする伝統的な社会学を批判し、「市民社会」を構築する学問として社会学を再定義しようとした。そこでは、市民間の対話の場をつくることが目指される。本論文は、市民による対話において「経験」がいかなる意味を持ちうるのかを明らかにし、経験が市民的公共性を作り上げる可能性について示した。

### 1. 問題の所在

本研究では、2000年代にアメリカ社会学研究において主要な争点の一つとなっていた「公共社会学」(public sociology)について、主に市民間における自己の経験についての対話をするための条件である「社会的想像力」との関係性について考察するものである。

2004年のアメリカ社会学会において、同学会会長に就任したマイケル・ブラウォイ(Michael Burawoy, 1947-)は「公共社会学へ向けて」(“For Public Sociology”, 2004)という就任演説を行った。公共社会学とは、端的に述べるならば「何のための知識か」(knowledge for what)を問うてきた既存の社会科学に、「誰のための知識か」(knowledge for whom)という問いを加えることで、市民社会に開かれた専門知識の構築を目指すような社会科学の方法論であると定義できる。[Burawoy: 2004, p.1606]。公共社会学は、専門家集団のために専門知識を生産するだ

けに留まらない、市民社会への応答責任を果たす社会科学といえよう。

このような公共社会学の視点は、市民社会への応答性という社会科学のあり方を示したという点で、大きな意味を持つ。だが、ブラウオイによる公共社会学は、同じ市民社会への応答性を主張する研究者から批判も受けている。例えば、批判社会学の視点をを用いた研究を行っているスタンレー・アロノヴィッツ (Stanley Anorowitz, 1933) は、「ブラウオイの論文における空白とは、マートンが絶えず提起してきたように、アメリカ社会学が経験的調査を理論と適応させていくための社会運動および義務から逃避するという文脈の分析である」[Aronowitz: 2005, p.366] と述べる。また日本で批判社会学の視点からブラウオイを検討している瀧川裕貴は「ブラウオイの主張する公共社会学や社会学と公衆との対話に着手する前に、あるいはそれとともに、社会学と規範的探求との関係に関わるより理論的問題に対して、一定程度の見通しをつけておく必要がある」[瀧川: 2007年、26頁] と述べている。これらの批判では、ブラウオイの公共社会学には、社会科学が果たすべき最も重要な義務である「知識の生産」ということに答えられていないということに焦点が当てられている。つまり、公共社会学は社会科学 (social science) の義務たる「知識の生産」に貢献していないということである。

このような公共社会学への批判は、社会科学が「知識の生産」を主な仕事としているという自認から生じている。だが、この認識こそがブラウオイの批判するものである。ブラウオイは、公共社会学を論じる人々について「社会学を公衆 (publics) との会話のなかに引き入れ、公衆自身も会話の中にいる人間であると理解している」[Burawoy: 2005, p.7] ことになると述べる。このことは、市民ひとりひとりが、社会学の提起する問題について話しあい、市民社会の構築を目指していくという、公共社会学の理念を示している。公共社会学は市民が社会問題を考える場、あるいは市民生の涵養を目指すのである。そのことを引き継いで公共社会学は、専門性を育成する大学生へ向けた市民生の涵養にも目を向ける。すなわち、「個人だけでなく調査もまたそれ自身が道徳的なキャリアを持ちうる」[Burawoy: 2004, p.1610] ようにすることが教育の使命なのである。

このことを踏まえて、本論文では「自己の経験」を中心として、いかなる対話がなされるのかについて明らかにしていく。そして、その対話がいかなる市民社会を構想しうるのかについても明らかにする。

## 2. ブラウオイによる社会学の4つの分類

まず、公共社会学とは何かについて確認しよう。そこで問題となるのが、公共社会学ではない社会学とはどのようなものかということである。ブラウオイは公共社会学を定義づけるときに、専門社会学 (professional sociology) ・政策社会学 (policy sociology) ・批判社会学 (critical sociology) ・そして公共社会学という四つの区分を設けた (図1を参照) [Burawoy: 2005, p.11]。この区分はそれぞれ専門家集団／非専門家集団という「誰のための知識」という二元論と、道具的知識／反省的知識という「何のための知識」の二元論を組み合わせで成立している。公共社会学者の一人である京谷栄二は、「第1に、社会学の分析枠組み、専門概念、方法論などを手

	専門家集団のため	専門家以外の集団のため
道具的知識	専門社会学	政策社会学
反省的知識	批判社会学	公共社会学

(図 1: Michael Burawoy “For Public Sociology”, *American Sociological Review*, Vol.70, 2005, p.11. より作成)

段としてアカデミズムの世界への発信を目的として遂行されるプロフェッショナル社会学、第2に、それらを駆使して、企業や国家などの学者以外の組織の顧客のために成果を産出するポリシー社会学、第3に、前2者の依拠する前提としての価値やイデオロギーを吟味し批判するクリティカル社会学、最後に、アカデミズム内部での批判に終始する前者とは異なり、現実の社会におけるパブリックの状態に接近し、パブリックと関係しながらパブリックのために成果を産出するパブリック社会学」[京谷: 2011年、63頁]と述べ、ブラウォイの社会学の分類を整理している<sup>1</sup>。

ブラウォイは、普遍的な社会学の分類を提案しているわけではないことを注意したい。ブラウォイは社会学がどのような価値で、どのような人のための学問かをわかりやすく表すための見取り図としてこの四象限を設定したにすぎないのである。そこでは、「より正しくテストされた方法、蓄積された知識の体系、明確な問い、そして概念的なフィールドワーク」[Burawoy: 2005, p.10]という専門社会学、「クライアンと共有した目標への補助という社会学」[Burawoy: 2004, p.9]という政策社会学、「専門社会学に偏見、表現していないもの、オルタナティブな基礎で作られた新しいリサーチプログラムを促進することへと目がいくようにする」[Burawoy: 2004, p.10]という批判社会学という体系を示した。これらの社会学のあり方は、それぞれの固有性があり、相互補完的なものである[Burawoy: 2004, p.1609-1610]ブラウォイの意図は、公共社会学が担う仕事がどのような範囲であり、どのようなことが公共社会学の固有性なのかを示すことにあるのである。

では公共社会学の固有性とは何か。それについてブラウォイは、社会学の役割を市民との「対話」(dialogue)の中に位置づける。ここでブラウォイが述べる「対話」とは、市民が言葉を持ち、伝えあいながら、社会のあり方を変えようとする場である。「対話」とは、単に社会学者が市民に社会の現実を知らせるということではない。実際にブラウォイは、ロバート・N・ベラー(Robert N. Bellah)やデイヴィッド・リースマン(David Riesman)ら「伝統的公共社会学」(traditional public sociology)が、アメリカおよびアメリカ人の苦境や争点を示すものの「行動的に公衆の中へと参画しようとしなかった」[Burawoy: 2004, p.7]ことを批判する。伝統的公共社会学は、市民に争点を示すことで、市民が自己の生活に公共的な価値を位置づける知識を与えうる。だが、伝統的公共社会学は、直接的に市民に関わらないことが問題であるとブラウォイは指摘するのである[Burawoy: 2004, p.7]。

そこでブラウォイは、もう一つの公共社会学として「有機的公共社会学」(organic public sociology)を提起する。ブラウォイは以下のように述べる。

しかし、他のタイプの公共社会学がある——可視的、重厚、行動的、ローカル、そしてしばしば反公共的なものと密接につながる社会学者の仕事である有機的公共社会学である。公共社会学の大部分は確かに有機的な種類のものである——すなわち、社会学者は労働運動、隣人組織、信仰のコミュニティ、移民の人権団体、人権団体組織にいるのである。有機的公共社会学者と公衆の間には対話があり、それは相互的な教育の過程である。公共社会学の認識は不可視的で個人的、そして社会学の専門的生活と離れていると思われがちなままの有機的なものまで広がる。そのような公共社会学のプロジェクトは、有機的なつながりを社会的な生活の一部として証明するために、不可視なものを可視的に、個人的なものを公共的にするのである。[Burawoy: 2004, pp.7,8]

有機的公共社会学とは、抽象的な社会学研究を行うのではなく、具体的なコミュニティや当事者とともに、その諸問題のただ中で研究する態度のことである。このことをブラウオイは「従事」(engagement)という。「従事」とは、当事者やコミュニティの中において、その問題に耳を傾け、解決を志すことである。それゆえ、市民に単に争点を示す伝統的社会学とも異なる。その意味で「有機的」という言葉は、市民のなかで活動し変革することを示す<sup>2</sup>。有機的であることで、社会学は市民との相互作用的な知識を構築することができる。京谷栄二はブラウオイの有機的公共社会学を「社会学者が単に研究調査を行い分析結果を出すという一方向的なものではなく、分析結果は絶えず対象に還元され、社会学者は対象の反応を受け取り、その反応にもとづいて自らの研究を反省するという、双方向的・対話的なコミュニケーションによるもの」[京谷: 2011年、2頁]であると述べる。ブラウオイは、伝統的公共社会学とは異なり、ローカルで相互的なコミュニケーションを中心とした場づくりの必要性を訴えたのである。

### 3. 盛山和夫による公共社会学への批判

このような公共社会学のあり方は、国内でも検討されてきた。その代表的な論者が、公共社会学への批判をいち早く行った盛山和夫である。盛山は「もしも社会学が専門的な学術研究に閉じこもることが可能なのであれば、それに徹することに問題はないはずだ」[盛山: 2006年、93頁]と述べる。盛山によると、「今日の社会学が直面している本当の問題は、まさにこの『客観的真理』という価値が根底から疑われているということ」[盛山: 2006年、93頁]こそを問うべきであるとしている。このような視点に立つならば、公衆との対話で社会学に公共性を持たせるといふ視点に立つブラウオイの公共社会学は、そもそもの外れな批判なのである。あえて踏み越えたことを述べるならば、盛山は公共社会学など取るに足らないものなのである。

ではなぜ盛山は公共社会学そのものに批判的な態度をしているのだろうか。それは、盛山が「社会学の営為は、実証的であれ理論的であれ、必然的に対象意味世界に関係しながらそれとは異なる意味秩序を提示すること」[盛山: 2006年、104頁]を社会学研究であるとみなしているところにある。盛山は社会学を「共同性」の学問であると見なしている。ここで「共同性」とは、「個的なものが連帯し協働して1つの集合的な世界や価値を共有していること」[盛山: 2006

年、103頁]である。盛山にとって社会学とは、そもそも人びとが社会的実践を反省し、より良くするための「共同性」を構築することを目的としているのである。

そのために、社会学研究とはいかに誰しもが共通して持ちうる知識を生産しうるかを常に意識している。盛山がそのような視点に立つとき、公共社会学の問いはそもそも社会学が本来備えているもので、「本来であれば社会学を構成しているはずの広範な専門領域にとって、社会学という学問共同体にとどまり続けることに魅力を感じるような新しい展開が極めて乏しい」[盛山：2012年、14頁]ということが問題になるのである。

「公共社会学」という名称は、このような公共性の探求に志向した営為にこそふさわしいだろう。いうまでもなく、これは経験科学の境界を越えて、規範的な探求に踏み込むものだ。規範的な探求としての社会学の営為は、すでに示唆したように、決して稀だったわけではない。コント、デュルケム、そしてパーソンズは言うに及ばず、プラグマティズムのアメリカ社会学、批判理論やハーバーマス、あるいはジンメルやシェーラーやサルトルなど、さまざまな形で共同性を探求した社会学と社会理論の脈々とした系譜が存在する。しかも、これらはきわめて理論的であった。ただし、前述のように、共同性の理念だけで今日の文化多元主義状況に立ち向かうことはできない。より良い解釈とは、より良い共同性の提示、すなわち、異なって対立している諸文化と意味秩序に対して、それらが共有しうる新たな意味秩序を提示することである。それは、内部的視点に立ちながらも自らを越える秩序構想を探求するというすぐれて規範的な営みである。[盛山：2006年、105頁]

盛山にとって社会学とは、共同性に立ちながらもそこで成り立つ意味秩序を不断に書き換えていくものである。それゆえ社会学の目的とは、既存の意味秩序の中で意味の書き換え、発見という活動の中で新たな規範・価値体系を創造していくことにある。瀧川裕貴は公共社会学の意義を「社会学理論の諸学説を再構成し社会的規範理論に固有のモメントを抽出すること」、「既存の規範理論の社会理論的前提を明るみに出し批判的に検討すること」、「これらの作業に基づいて制度の多元性を尊重する制度多元主義の社会的規範理論を構築すること」と述べている [瀧川：2007年、36頁]。日本の公共社会学論争では、人と人とが共同体を築くための共通した解釈基盤としての言語・ルールといった「共同性」を作ることこそが社会学の責務であると考えられているのである。

日本の公共社会学論争の論者に共通して見出されるのは、社会学研究および社会学が解決すべき課題に対して、いかにして主体的な改善を加えることができるのかということである。その限りにおいて、日本の公共社会学論争の目指したことは、研究者コミュニティにおける共同性の復権、およびそれをとおした科学として社会学の信頼を取り戻すことに他ならないのである。

#### 4. 「社会学的想像力」から公共社会学を眺める

ブラウォイの公共社会学とは、市民間の対話を中心とした市民社会の構築のために示されたものであった。他方で、盛山が論じたように、そもそも伝統的な社会学もまた、市民社会における対話のための「共同性」の構築を目指している。そのことを踏まえるならば、ブラウォイによる公共社会学の提起は、焦点を外したものであるということになる。だが、そもそも公共社会学は、伝統的な社会学が構築する「共同性」を踏まえなければいけないとされている。ブラウォイは「公共社会学・政策社会学は専門社会学なしでは存在しえない。というのも、専門社会学は正統性・事業性・区別可能な問題の定義・知識の関連の体系・そしてデータ分析のための技術を提供するからである」[Burawoy: 2004, p.1609]と述べる。公共社会学は、専門社会学の持つこれらの技術を前提にしなければいけない。というのも、このような専門社会学の技術は、社会的事象に関する相互理解が可能となるような知識を練り上げるのに有用だからである。その意味で、公共社会学は伝統的な社会学を「超える」社会学というわけではない。むしろ、伝統的な社会学を「前提としている」のである。

では、公共社会学の意義とはどのようなものであろうか。先にも見たように、公共社会学は、伝統的-有機的という二分法で説明されていた。ブラウォイにとって、公共社会学とは、伝統的な社会学が志向した「共同性」といったことから、市民社会に貢献しうる社会学的な知識を提供することだけに留まらない。ブラウォイはローカルで相互的な社会学を構想しようとしたのである。ブラウォイは、公共社会学が「学び」、あるいは「教育」を促すべきであると論じている。ブラウォイは「社会学者と学生との間、学生の自己の経験の間で対話し、最終的には大学を超えて学生とともに公衆と対話することを目指す」[Burawoy: 2005, p.9]と述べる。ここでブラウォイは彼のいう「対話」の意味を示す。すなわち、「対話」とは、個々人の経験をテーブルに乗せ、その意味を探索しあう場であるということである。このことによって、個々人の経験は公共的な意味を持ち、解決すべきものとして考えられるようになるのである。

このことは、ブラウォイが引用するチャールズ・ライト・ミルズ (Charles Wright Mills, 1916-1962) の研究を手がかりにして示されたものである。ここで思い起こされるのが、ミルズの「社会学的想像力」である。「社会学的想像力」とは、社会学的思考をする資質 (quality) である (Mills, 1959, p.13=14頁)。先にも述べたように、ミルズは生きられた経験と個人的トラブルを公共的争点とのつながりのなかで解釈することを模索した社会学者である。ミルズは「社会構造の理念へ念頭を置くこと、および感受性を用いることは、多様性豊かな生活環境のつながりを追うことを可能とする」(Mills: 1959, p.11=14頁)と述べる。多様性のある生きられた経験および個人的トラブルはそれ自体だけでは理解することができない。それゆえ、社会構造をテクニカルに理解した公共的争点というテクストを用いることで、はじめて個々人の生きられた経験および個人的トラブルは公共性を得るのである。以上の点で、ミルズの試みは、市民個々が自己自身の経験が公共的なものであり、社会的に解決すべき課題であると再認識することを可能にするという意味で、公共社会学のあり方と一致する。

だが、ブラウォイはミルズを「有機的」な公共社会学者であると簡単には位置づけられない

としている。というのも、ミルズはあくまで市民個人が自己を公共的争点の中に位置づけることが問題としているからである。穿った見方をすれば、ミルズの視点では、共同して公共的争点を解決しようという考えには至れないおそれがある。それゆえ、ブラウォイはミルズの研究を評価しつつも、批判的な視点で捉える。ブラウォイはミルズについて以下のように述べる。

ミルズは理想的な社会学者として製作者 (craftworker) であることを提起する——すなわち、理論と経験的調査を共に持ちより、社会的環境を社会構造に、ミクロをマクロにすることを試みるような孤立したモナドとしての社会学者である。グラムシの視点から見ると、ミルズの孤立主義は不条理な自己欺瞞であり、社会学的労働のヴィジョン(あるいは区分)を前身させることに反する象徴的に近い立場である。(Burawoy: 2007 p.8)

ブラウォイはミルズが「孤立主義」であることを批判する。「孤立主義」とは、客観的な視点をを用いて研究することを指す<sup>3</sup>。すなわち、ミルズの実証研究は相互的でないのである。ブラウォイは「それゆえ、ミルズの視点は伝統的社会学者のものであり、社会の外部および上の視点に立ち、社会と直接的なつながりを持つことを拒否する」(Burawoy: 2007, p.11) と述べる。それに対してミルズは「多くの個人的な生活環境の変容を理解するためには超越したところから眺めなければ (to look beyond them) ならない」(Mills: 1959, p.10=14頁) と述べる。ミルズの実証研究は、観察者と社会構造とのつながりを客観的な視点をを用いて分析しようとする。その視点は、観察者の生きられた経験を公共的争点とつなげる点では公共社会学である。しかし、ミルズは社会科学的研究とは「超越したところから眺める」ことと考え、研究者と研究対象を分けるので、ブラウォイが求める、市民間での対話という「有機的公共社会学」の視点とは異なるのである。

以上のように、ブラウォイはミルズを公共社会学に位置づけた<sup>4</sup>。その位置づけとは、ミルズは公共社会学者であるものの、有機的公共社会学者ではないということである。ブラウォイは「ミルズは1960年代と1970年代の苦境の基礎となる人種とジェンダーの問題、そして1970年代のアメリカ専門社会学を生き返らせ変容させた有機的公共社会学の差し迫った問題を無視した」(Burawoy: 2007, p.11) と述べる。ミルズは、有機的公共社会学者のように、自分自身で社会運動や変革に参加することはなかった。ミルズにとって社会学とは客観的な視点をを用いた科学なのである。それゆえ、ミルズは有機的公共社会学が求める社会学研究の条件に符合しないのである。

## 5. 「政治学的想像力」の方へ

ブラウォイのミルズへの批判はまた、ミルズの提起した「社会学的想像力」への批判的検討を行う。ミルズの「社会学的想像力」のプロジェクトは、ブラウォイも継承するところのものである。その一方で、ブラウォイは「社会学的想像力」の目的について、「生活環境と社会構造との関係を理解することはそれ自体だけでは解放には至らず、ポストモダンのベシニズムのよう

な解放になるのみである」(Burawoy: 2008, p.369)と評価する。というのも、社会学の知識は、社会問題を整理することはできるものの、知識だけでは人びとが直面している苦境を直接には救うことができないからである。ブラウオイは社会学の知識で個人的トラブルを理解するだけでは不十分であると考えるのである。

では、ブラウオイはどのような点に批判を加えるのか。そこで着目すべきなのは、ブラウオイが提起する「政治的想像力」(political imagination)である。「C.ライト・ミルズへの手紙」の結論部分にはなるが、ブラウオイは「政治学想像力」について以下のようなことを述べる。

個人としてわれわれ社会学者は四つのタイプの知識の一つかそれ以上を専攻するが、希望があるとすれば、統合された参加すべきプロジェクトを忘れたことがないことであろう——すなわち、より人間的で、平等で正義にかなった社会を創造することである。それには社会学的想像力だけでは不十分であり、政治的想像力が必要なのである。(Burawoy: 2008, p.374)

この引用から考察するに、政治的想像力とは、人間性、平等、正義、民主主義などの公共的価値の実現を主体的に目指す資質のことである。それは、社会学的想像力を目指す個人的トラブルを公共的争点につなげるだけでは不十分である。というのも、ただある個人的トラブルを公共的争点にしたとしても、その解決のための行動には至らず、ただ市民は受動的な存在になるおそれがあるからである。個人的トラブルと公共的争点につなげることは、「政治的プロジェクト」になる必要がある(Burawoy: 2008, p.369)。そのために、ブラウオイは公共的価値の実現を目指す「政治的想像力」を構想するのである。

ではブラウオイは、「政治的プロジェクト」としてどのようなことがあると考えているのか。ブラウオイは、ミルズが、彼の死後に起こる「学生運動、女性運動、公民権運動、反戦運動」(Burawoy: 2007, p.371)を捉え損ねたことを批判する。ミルズは学生運動をはじめ様々な運動で引用された一方で、ミルズ自身は「無力な市民」という大衆社会のヴィジョンを捨てられなかったのである。このことに対して、ブラウオイはフェミニズムをはじめとする社会運動という政治的な活動の意義を認める。

ミルズがフェミニスト運動を定着したものと見なそうとしないことが残念だ。なぜなら、フェミニズム運動は有機的公共社会学の注目すべき例を表しているからである。キャサリン・マッキヤノンが書くところによると、「フェミニズムは、個々の関心を力説するところから現れた最初の理論」である。フェミニズムは社会的環境と社会構造をただつなげるというだけではなく、婦女暴行が暴行罪となること、セクシャルハラスメントとレイプが法的措置の主題となることに代表されるような個人的トラブルを公共的争点とする。思いがけないことだが、フェミニストが述べるところによると、個人的なものは政治的であり、男性のルールは政治的法規となる。(Burawoy: 2007, p.372)

ブラウォイはフェミニズム運動を公共的価値の実現を目指した最初の理論であると述べている。フェミニズムは、有機的公共社会学の条件である「ローカルで相互的なコミュニケーションを中心とした社会学研究」だけでなく、公共的価値の実現のための実践なども行ってきた。ミルズの「社会学的想像力」の個人的トラブルと公共的争点をつなげるということだけでなく、有機的公共社会学はフェミニズム運動などの実践的な活動を取り入れることで、「政治的想像力」は公共的価値の実現という規範的問題を社会学研究に含み入れるのである。以上の点で、ミルズの「社会学的想像力」は「政治的想像力」へと書き換える必要があるのである。

## 6. 対話と社会学——ブラウォイの教育的視点

ミルズが「社会学的想像力」を論じた際に重要視されたのは、個人的トラブルと公共的争点のつながりで自己の生きられた経験および個人的トラブルを理解することにあると言えよう。自己の生きられた経験および個人的トラブルは公共的な文脈で初めて理解される。ミルズは「自らをある時代の中に位置づけることで、自己の経験を理解し、自己自身の運命を推しはかることができる」(Mills: p.5=7頁)と述べる。ミルズは自己の構築を公共的争点による解釈の中に位置づけるのである。

だが、ブラウォイの「政治的想像力」を踏まえれば、「社会学的想像力」の議論は不十分である。ブラウォイは「政治的想像力」を用いてさらに一步踏み込む。その議論とは、学生との対話、すなわち教育への視点である。

むしろわれわれは学生を生きた経験を持つ者として考えなければならない。それにより、学生自身が構築された歴史的・社会的文脈のより深い自己理解をもたらすことができる。われわれは経験を保留せずに参加することで自己理解することができる。教育は育てるべき社会学の姿勢についての連続した対話となる——すなわち、社会学者と学生との間、学生の自己の経験の間で対話し、最終的には大学を超えて学生とともに公衆と対話することを目指すのである。(Burawoy: 2005, p.9)

ブラウォイの述べる教育とは、対話そのものである。それは、単に社会問題を話し合うことを意味しない。対話とは、個々人の生きられた経験を、学生自身の個人誌と議論から相互理解を通じて解釈する作業である。ブラウォイは「経験は特別な活動(engagement)を通じて育て上げられる」(Burawoy: 2004, p.1608)と述べる。ミルズは個々人の生きられた経験は公共的争点というテキストで解釈されうるとした。だが、ブラウォイの視点はミルズのものとは異なる。ブラウォイは個々人の生きられた経験は公共的価値の実現という活動を通してなされる。もちろん、ブラウォイの目的は公共的活動の従事そのものではない。ブラウォイはサービスマーケティングを評価するものの、その目的は「多様な公衆を教室に持ち込む」ということを中心にされる(Burawoy: 2005, p.9)。公共的活動に従事することで、学生は自己とは異なる他者に触れることができる。他者に触れることで、自己は揺らぐ。すなわち、自明とした常識や文化を揺る

がし、自己の生きられた経験の意味を、自己自身とともに変容させるのである。

ブラウォイの公共社会学は対話を中心とした社会学であった。それは単に市民が公共的活動に入ることで、多様性や異質性に触れることでもない。小玉重夫は「意見の異なる『他者』同士がつくっているのが社会」であり、「物事を批判的に判断したり、意見の違いを突き合わせ問題を解決したりする『政治的センス』が、市民に求められる」と述べる [小玉: 2013年、168頁]。個々人は多様性や異質性と触れることで社会のあり方を理解することができる。ブラウォイの公共社会学の構想は、ミルズの社会および自己自身の「理解」にとどまらない、政治的実践や対話という行動を触発させる構想を示した点で、有意義なのではないだろうか。

## 《参考文献》

Anorowitz, Stanley, “Comments on Michael Burawoy’s “The Critical Turn to Public Sociology””, *Critical Sociology* 31(3), 2005, pp.333-338.

Burawoy, Michael, “Public Sociologies: Contradictions, Dilemmas, and Possibilities”, *Social Forces* 82(4), 2004,

——— “2004 Presidential Address: For Public Sociology”, *American Sociological Review* 70, 2005.

——— “Public Sociology: Mills vs. Gramsci Introduction to the Italian Translation of “For Public Sociology””, *Sociologica*, 1/2007, pp.7-13.

Denzin, Norman K., “Re-Reading The Sociological Imagination”, *The American Sociologist* 20(3), 1989, pp.278-282.

Mills, Charles Wright, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press, 1959. (鈴木広訳『社会学的想像力』、紀伊国屋書店、1965年。)

——— “Open Letter to C. Wright Mills”, *Antipode*, Vol.40(3), 2008, pp.365-375.

京谷栄二「研究動向：テーマ別研究動向（パブリック・ソシオロジー）」日本社会学会編『社会学評論』第62号2巻、224-235頁。

——— 「社会学のディシプリン再考——パブリック社会学をめぐる国際論争」、社会学系コンソーシアム・シンポジウム「再論 日本の社会福祉学・社会学の国際化に向けて」2011年、1-5頁。

小玉重夫 『学力幻想』筑摩書房、2013年。

瀧川裕貴 「公共社会学論争の検討：社会学的規範理論の定立に向けて」、ソシオロゴス編集委員会編『ソシオロゴス』第31号、2007年、20-39頁。

盛山和夫 「理論社会学としての公共社会学に向けて」、日本社会学会編『社会学評論』第57号1巻、2006年、92-108頁。

——— 「公共社会学とは何か」、盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編『公共社会学1：リ

スク・市民社会・公共性』東京大学出版会、2012年、11-30頁。

## 注

- <sup>1</sup> この引用中で京谷が用いている社会学の名称は、それぞれ「プロフェッショナル社会学」が「専門社会学」、「ポリシー社会学」が「政策社会学」、「クリティカル社会学」は「批判社会学」、そして「パブリック社会学」は「公共社会学」に対応している。京谷は「社会学」の前の形容詞を翻訳しない方針をとっているものの、本論文では「批判社会学」「公共社会学」がそれぞれこの訳語で定着しているためそれぞれ訳出した。また、その訳出に合わせて、「専門社会学」「政策社会学」も訳出した。
- <sup>2</sup> ブラウオイは、公共社会学の伝統的・有機的という二分法をイタリアの社会学者であるアントニオ・グラムシ（Antonio Gramsci）から引用している。ブラウオイはグラムシを「よりローカルで重厚な、より行動的で楽観的な公衆であり、労働運動、抑圧されたマイノリティ、囚人、弁護士、あるいは国際 NGO への直接的な従事する公衆であることを見つけた」（Burawoy: 2007, p.8.）ような社会学者であると評価している。
- <sup>3</sup> 同様の批判は、1990年代にミルズの社会学研究を分析したノーマン・K・デンジンも述べている。デンジンは、「ミルズは社会学的想像による一段階上の観点から批判したテキストを創造的に想像し、構築する」（Denzin: 1989, p.279.）と述べる。デンジンの場合、ミルズはポストモダンの状況という多様性に合わせた研究をせず、「自由と理性」という近代社会学的な語彙で社会的現実を理解することが問題とされている。
- <sup>4</sup> 本論文ではミルズを公共社会学として位置づける引用を用いたが、ブラウオイは必ずしもミルズを公共社会学者として見なしているわけではない。ブラウオイはミルズを「批判社会学」（critical sociology）に位置づけることもある。ブラウオイはミルズがポール・ラザースフェルドらの応用社会研究センター（Bureau of Applied Social Research）への批判を行ったことに着目し、「（ミルズの）批判社会学への転回は、社会学であることを超えて、社会学から遠くだがつながる『聞け！ヤンキー』（邦訳：キューバの声）、『第三次世界大戦の要因』などの公共知識人の領域へ至る動きと一致している」（Burawoy: 2005, p.14）と述べる。ブラウオイはミルズがラザースフェルドらに代表される専門社会学（professional sociology）への「社会学内部の専門家集団へと向けられたもの」（瀧川: 2007, 22, 23 頁）である批判的視点を向ける点に着目し、ミルズを批判社会学へと位置づけるのである。